

昭和
三十八年七月二十三日
第三
行
郵便
物認
可
毎月一回・十五日発行

(通第一七六号)

目次

「教行信証」信樂釈……………	近角常観……………	(1)
求道硯滴(三)……………	福島政雄……………	(7)
仏の存在について……………	高原憲……………	(11)
嬉しい事悲しい事……………	三瓶徳英……………	(13)
酒見先生講話(二)……………	西村正安……………	(15)
聖人に導かれて……………	花田正夫……………	(22)

慈光

第十五卷

第十二号

「教行信証」信樂釈

(現生正定聚二)

近 角 常 觀

又他の今まで聴き慣れて居ぬ人の側——必ずしも青年の人で無くても、今まで聴きつけて居られぬ人の側に対して注意すべき事は、それらの人は、一念ホツと慈悲に気がつく、「自分はもうこれで得た、もう之でよい」との考を起し易いのである。

全体、自分は弥々煩惱具足の仕て見ようなき凡夫なることを知らせて貰うたが信心であるのに、その一念に反対に「自分はもう悟つた」「もう分つた」「もう偉くなつた」となる故、茲で再び疑いを起し、又々悲観に沈むとなるのであります。

どうかと言うに、先ずそれ等の人は、たれかれに、此の自分の頂いた味いを知らさねばならぬとなる。処が思うように人が聞いて呉れ、ばよいのであるけれども、矢張り自分が久しく分らなかつたと同様に、人も中々聞いてくれぬ。するとそれ等の人は、自分は信仰を得て變つて居るのに、人がその味いを了解して呉れぬと、頗る面白くない。自分の信仰を伝えようとして却つて又々煩惱が起る。

これはおかしい、何うかしたのか知らぬ。これは自分は信仰を得たと思うてたけれど、得て居無かつたのか知らぬ。ここの言う風に苦しむ人が多いのであります。これは初めの一念に、自分はもう善くなつたと高上りした故、再び墮ちるのである。先き程言う如く『無我愛』などの仆れたが即ちこれなのであります。

それで私の能く言うことでありますが、信仰の形式に、三角形の頂点で立つたと、底辺で立つたと二つある。頂点で立つた方は不安定で、一点何か触るものある時は、忽ち仆れる。一寸何か事あると、一遍に引くり返つて仕舞うのである。処が他力信仰は底辺で立つ方である。初めから倒れている故、何か事あると重みは底辺全体で受ける故、どんな事ありても倒れる事がない。

処が青年や、初めて信仰を経験せらるる人の多くは、この頂点で立つ方で行こうとするのであります。現に私なども長らくこれで苦しんだ。私は信仰に入つた当座「自分はこれで真実の信仰を得た。この上はどうか国

家、社会、政治の上にも、此の信仰で……」

と、一時大いに主張したのであつたのでありますけれども、何うも思うよういかなかつた。これではいかぬと、今度は個人々々に法を説くようにしたのであるけれども、それでも矢張り思うよういかなかぬ。十年やりて、とうど駄目だと分り、翻つて見るに、初めから人に説く位の事と思うよういけると思うて居たのが大間違ひであつたのである。思うよういかなかぬ処が、最も有難き処であつたのであります。

○ 又親鸞聖人にはこの事がある。御弟子中思うように信心を聞かれぬ人があつた。この時の聖人の御言葉には

「親鸞は凡夫の身として、人を信仰に入れようなど思うた事がない。我々凡夫である以上、人を信仰に入らしむるなどの事、到底出来ぬのである。思うよう衆生化益出来るは淨土に参らせて貰つた上の事である」と。処が御存知の如く、其の聖人に又向うた弁円を初め、皆信仰に入つたのであります。

併しここで聖人は、弁円を信仰に入れてやろうなどとの思召しは微塵もない。

又或人はかつて、自分の兄及び兄嫁に対して、出来るだけよく尽していこうと考え、遂に自分の考を兄に思い切つ

て披瀝したが、思うよう用以て呉れぬ。遂にそのために苦しんで信仰に入つた人もあります。

斯くこれから考えると、思う通りにしていこうなど考えているのが大間違ひである。信仰は思う通りにして行くで無い。思うようにならぬ苦しみ人生に、お慈悲一つで満足して、その中に安心して行ける処が、信心であります。故に飽くまでも、此の身は虚仮不実の浅間しき身なることを忘れてはならぬのである。

又よく青年者の間には「信仰上真実の意味で、政治実業を行おう、真面目に実行しようと思うても、どうしても本当に行かぬ」と歎く人があります。

これにつきて、此の間も、或る政治にたずさわつて居る人が来られて「政治家の仕事は、どうしても人生五分々々の争である。この間に立ちては、何うしても思うように行かぬ」と言われた。

そこで私は「行かぬというは、それは信仰前の事にて、信後初めて、それで行けるのである」と話したけれども、然し、其人はどうしても行かぬと言わるる。そこで私は「イヤ然うで無い。信仰は何にしても皆それが信仰の上より行けるのである。蓮如上人の『御文』には

まず当流安心のおもむきは、あながちにわが心の悪きをも、また妄念妄執のこころのおこるをもとどめよとい

にもあらず、たゞあきないをもし、奉公をもせよ、獵す
なごりをもせよ、かゝるあさましき罪業にのみ朝夕まど
いぬる我等ごときのこといたすものを、たすけんとちかい
まします弥陀如来の本願にてましますぞと深く信じて、
云云。

と、あつて、する事に於いては、即ち商売もせよ、奉公を
もせよ、乃至獵すなどりをもせよである。即ち為る事に於
いては譬え如何なる事をしよう、唯肝腎なるは、次の
『斯る浅聞しき罪業にのみ朝夕いぬる我等如きの徒者』
をとある一言である。真にお慈悲頂いた者ならこの考えが
あるから、この上より政治であれ、実業であれ、必ずやつ
て行ける筈である」

と話した事であります。さればとて信仰前と同じ事を遣
らぬでは無けれども、併し信心頂いた者に於いては、自分
は実に罪惡生死の申訳の無き者という頭の折れた自覺があ
る。これがあるから人の罪惡に対しても同情の心が届き、
社会の腐敗に対しても弥々共にお慈悲を仰がねばならぬと
の心が起り、其間に立ちて安んじて、大悲の道を辿らせて
頂くことが出来るのである。若しこれがないと、即ち自衛
のため、社会の間に立ち難いような信仰になる。彼の田園
生活を樂しむなどの信仰は、天下通ぜざる無き信仰とは言
えぬのであります。故にいやくも信仰の上からは商売を

が、出来ぬことは出来ぬのである。此の人の見て居ぬ処で
も、出来ぬことは出来ぬとなる処が他力信仰の生命であ
る。斯く他力信仰は広大のお慈悲を頂いて、実に今までは
申訳なかつたとなつた一念には、動かす可からざる処を生
じて来る。

然るにここをお慈悲さえ頂けば悪い事をしてでも障らぬの
だという風に言うは大間違ひである。動もすれば、この世
で正定聚の分人を言う人の中には、この取り違えがあ
るのであります。

さて斯く今日は、一方理想家は「人生は罪惡の郷であ
る」、「自分は不完全極まる人間である」との自覺が欠け
てあるため、その故に、此の世で無理な要求を抱き、其の
きわみ惡平等を實現せんとして苦しむとなつて居る。危険
思想などはここから胚胎するのであります。

又一方、真宗の特色は、信の一念に於いて、広大のお慈
悲に罪惡の頭をひしがれるという処を頂かず、「真宗は獵
すなどりをしてよいのだ」という風に言うて居る方の側
は、知らず知らずの間に罪惡を許すという風になつてい
る。で、遠慮なく言うと、今日真宗繁昌の土地程、弥々横
着に流れ、平気で悪いことをやるといふ風がある。先日
も或人が来て言われるには

「人は皆、都会は善くない、田舎は質朴でよいと言うけ

するのにも罪惡なれば、田園にありて土をほじくるも罪惡で
ある。月給取りで衣食するも罪惡なれば、米を取りて喰う
百姓も罪惡である。仮りに地を踏み、足の行く処、人間は
罪惡ならざるは無いとの自覺が無くてはならぬのである。
こは重に信仰を理想的に考える青年諸君のために申したの
であります。

○
処がこの話は、同行信者の人には、成るべく聴かせ度く
無い。何故なれば、同行信者の人は、斯く言えは直く「人
間は信仰頂いても少しも変わらぬのである。家庭の不和は
人間だもの有る筈じゃ」とように言われる。これを押し進
むれば、結局人間は商売するためには虚言もやむを得ぬ。
ペテンをやらなければ、政治家として立てないとなるので
あります。

処がそうではなく、我々仏のお慈悲を頂けば、虚言を言
い度くても虚言が言えぬのである。今茲で虚言言うとい
うと思ふ処でも、どうしてもそれが口から出ぬようになるの
である。言わぬと勤めて言わぬので無い。言おうと思つて
も言えぬのである。これから言うと、同行信者の方が、
せめては／＼の思いより生活をたしなむなど言われるは、
勤めて善事を修するもので、甚だ感心せぬであります。

真の信仰の上からは、譬え人が見て居ようが見て居まい

れど、今日は反対である。選挙の時など、東京は正直でよ
い。田舎程平気で不正な事をやる。田舎はあれ程、口に念
仏を称え、如法にやりながらも、実にひどい事をやる」と話
した人があります。斯く真に仏のお慈悲に頭が下がつたで
無い間は、此の両者いずれかに陥入るのである。先程言う
如く『無我愛』などのあれ程やりながら倒れたも、理想に
傾いた為、遂に困つたのであります。

○
又一方、人生の出来事は何も彼も、仏のお慈悲だといふ
人もある。これだとその極み、妙な事になり、社会の秩序
も立たねば、自分の意見、所信も立たぬといふような事に
なるのであります。

譬えばここに一問題あるとするに、信仰の上からは、ど
うでもよいという問題は一つも有ることはない。茲は此間
も或人に尋ねられたのでありますが、信仰の上からは、こ
れでも、あれでもという事は無い。これだと一つ決つた道
があるのである。併しあつても出来ぬ、と言われるも、出
来ぬでもこれだといふ道が無くてはならぬのである。ここ
は明らかに区別がある。併しその代りそのために仕て見よ
う無いという時が、出て来るのであります。茲は能く世間に
信仰の結果に御都合主義といふ事を言われる。自分の都合
好い時に出て来て、都合の悪しき時は引込んで居るとい

う、この御都合主義に落入つてはならぬのであります。信仰はこの点、何処までも眞面目である。

その代わり一面は何処までも頭が下つて居るのであります。例えばここに我々が無実の罪で、世間から誤解を受けたとする。それを言い開きすればそれまでなるも、信仰上からは何うしても心中言い開き出来無い処がある。それは何故かというに、汝のそう思うは名譽心のためじや、と心に一点気がつくつと、例えなんと言われても弁解のして見ようない。自分の心を押えろと、どうしても仏に對し、罪が無いと言われぬ処がある。

先年、教科書事件の時、或人が全くの冤罪で拘引せられた。其人、氣がついて見ると、事實は全く無い事であるけれども、自分じやとして全く卑劣な考えを持つて居ぬとは言われ無い。仏に對しては、何うしても無罪と言われぬから、其人は法廷でそれから無罪を弁じ無かつた。これをその人が道徳的な考えでやつたのなら値打ちは無い。処が無罪々々と言うてる中は開かなかつたけれども、黙つて仕舞つてから無罪と分つて来たという事があります。

実に信仰は斯くの如き有様である。故に信仰は決して言葉や、心の綾や、心の慰みで無い。明らかに人生に大悲の眞のお恵みを頂いて、自分の罪深く申訳なき事を知り、其上より、広太のお哀れみ一つで人生に立たせて貰う事であ

る。以上は先日、或人から現生、正定聚の味につき、お尋ねがあつたから申したのであります。

で要するに從來より聴き慣れて居らるる多くの方は、死ぬと極樂往生といふところに重きを置かるる傾きがある。これだとすると、弥々救済を蒙る時は死にしまとなる。処が親鸞聖人は信の一念に、それ切り即得往生である。氣のついた一念にこの世から生死の根が切れ、未來仏となるべきものと決つて居る故、死ぬ時の事を兎や角言うに及ばぬと仰せらるるのであります。即ち平生業成とお示し下さるはここである。眞にお慈悲を頂いた者のことでもあります。

で以上申す事につき、親鸞聖人も『歎異抄』に、再々お示し下されてある。即ち初めに申した「煩惱具足の身を以て、すでにさとりを開く云々」は「この世でもう悟りを開いたのである。この上は悪いことしてもよいのだ」との間違ひに對してお示し下されたのである。

又「一念に八十億劫の重罪を滅すと信すべし」ということ云々。」の御教化は「信の上は念仏称え／＼善くして行かねばならぬ」と思う間違ひに對してお示し下されたのであります。なお申せば、聖人は信の一念に「前念命終、後念即生」と迄御示し下されたのである。これなど信の一念に、

眞実この世の生命おわるといふ事にて、眞実仏のお慈悲に生れかわらせて貰うた者でなければ、何の意味だか分からぬ。私は恐らく聖人十九の御時、磯長の聖徳太子の御廟にて「汝の命根、応に十余歳なるべし。命終すれば速に清浄土に入る。善信、々々、眞菩薩」の告命を受け給ひ、十年経つた二十九の時、生命終る積りでおいでになつた処に、計らずも法然聖人にお遇いなされて、信の一念に意外にも此の世の生命畢り、お慈悲の中に安心なされたのである。この御経験より、此の御言葉をお用にになつたと思うのであります。

で、我々の往生は、反す／＼も此の世で信の一念に決まるのである。して此世に在る間は、仏と共に生活させて頂くのである。実に一面非常に貴き立派なる日暮らしをさせて頂くのである。併しこの立派さは、この世を畢り、極樂に生れさせて貰うた上の立派とは別なのであります。

而して、以下お話する、今席の『華嚴經』の文が、皆この意味で、信仰上より書かれてあるのであります。

○
そこで今席の『華嚴經』の文の次には

『又言わく、如来は能く永く一切衆生の疑いを断たしむ』と。お慈悲を聞く一念に、如来は一点の疑いも無くなさしめ下さることとあります。

為一人一説是則為難

又『其の心の所樂に随つて、普く皆満足せしめんとなり』と。信仰頂く迄は誰しも世の中が斯くなればよからうと、外界に満足を求めて居るのであるけれども、お慈悲頂く一念に、その不足を言う自分が実に浅聞しき者なることが知られ、その者がお慈悲一つに満足させて貰いて、人生に更に不満が無くなつてしまふ。又不思議なもので、斯くなると、外界の事柄までが、総て都合よく運び、満足させて下さるのである。然し茲は何処までも内心が主で、設け外界に如何なる苦ありても、その苦が有りながら、其間に充分満足させて頂く事が出来るのであります。

法華經、見宝塔品にある金句に、「一人の爲に説くは、則ち難しとなす」とあります。教を聞いている者、一人一人が、これは自分一人のために特に教えて貰つてゐる、というふうにとれるように説くことは至難なこととあります。ところが歎異抄などに出てくる親鸞聖人のお言葉は不思議にもそのまま私一人のこととひびいて参ります。また近角先生の御講話を聞かれた人々から「スツカリ自分を見抜いて説いて下さつた」と、その法雨を喜んでいられる声を聞きます。これ難事を成しとげて下さるのであります。

求道硯滴

(3)

福島政雄

臼杵祖山先生は私にとつて第二の善知識と申すべきお方
であります。第一の善知識は近角常観先生であります。近
角先生からは私も家内もお叱りを受けたこともありすが
臼杵先生からは和光の御導きを受けましたのであります。
言わば近角先生は私の信仰上のお父さまであり、臼杵先生
はお母さまであると申しても宜しいであります。

臼杵先生は私の広島での二十一年の生活中、その後半十
年ばかりお育て下さつたのであります。先生のお住居は色
々お変わりになりましたが、後には大分県の中津に御落着
になりました。広島には月に一度つづおいで下さつたので
あります。広島浄宝寺でもお話しになり、高等師範でもお
話しになりました。お話はいつも非常に静かなお話であ
り、聴衆が眠つていてもどんなであつても御頓着なく、ゆつ
たりとしてお話しになりました。そのお話はなか／＼む
つかしかつたのであります。私はよくわからずに聴くこ
とが多かつたのであります。併し私の家内は臼杵先生のお
話はむつかしいけれども、一時間も拝聴している間に一つ

言つたそうです。

これが先生の私に対するお答でありました。私はまるで
その意味がわからず、その後数年その意味を考えて参りま
した。併し今考えますと融通のきかない私を和かにお誠め
になつたのであります。飄箏を讃嘆なされたのは、信仰の上から融通無碍の生活が出来たことを仰言つた
のであります。私は七十才を超えましても信仰の上の
無碍の生活が出来ないで、躓きだらけの日を送つていま
す。先生の御教がなかなか身につかず汗顔の次第でありま
す。

浄宝寺で先生から拝聴しましたお話の中で最も身にしみ
て感じましたことは、前にも申しましたことですが、長者
窮児の喩についての先生のお話であります。此の喩の家邸
や金銀財宝というのは親のいのちにあたえたものである。
喩の上では親が死ぬる前に財産を皆その子に与えるという
ことになっているが、実際は、親は死ぬると同時にその全
生命を子に与える。その子が幾人あつても一人々々の子に
親の全生命は入り込むのであると仰せられたのでありま
す。

このお話が私の身にしみとりました。その時の私は母
を亡くして五六年という頃でありましたが、先生のお話に
よつて世を去つた親が私の中に生きていることを感ずるよ

胸にひびくことがある、それだけでお話を聴いて有りがた
いと思うと申して居りました。

お話には面白いこともありました。或る時、浄宝寺でお
話を聴いていますと、先生は世の中に、瓜たん鯰ほど有り
がたいことは無いと仰言つて、瓢たん鯰といふことをしき
りに讃嘆なされました。私はすぐむきになる性質であり
ますので、お話が終ると奥の室にいらつしやる先生のところ
に参りまして、瓢たん鯰というお言葉についてお尋ね申
上げ、なぜ瓢箪なまずを有り難いなどと御讃嘆なさいまし
たかと詰問するように申上げました。

その時先生はそのお答として、次のようなことを仰せら
れました。

明治天皇が或る時、山県侯に、お前は子供が何人あるか
とお尋ねになつた。その時山県侯は、ハツよく取りしらべま
して申上げますとお答えになつたそうです。あとで陛下は
大変お笑ひになつて、山県だからあんな答をした。あれが
伊藤であつたら即座にこまかしの答をしたであらうにと仰

うになりました。歎異鈔に仰せられてありますように、親
は尽十方無碍の光明と一つになつて私の心の奥を照しとお
している、仏のおいのちと親のいのちとが一つになつて私
のいのちにとおつている、私は親の生きていた時よりも親
と近くなつてゐる。否親の方から私と一つになつてゐるの
であるということを感じるようになり、それはお念仏の裡
に味わされるということになりました。臼杵先生は私の亡
き親が今の私の中に生きてゐるということを自覺させて下
さいました。私は此の事で先生の御教を身にしみて感ずる
ようになりました。

壮年時代に先生は法隆寺で御修行になりました。その時
は経済上大変に困つておいでになつたそうでありまして、
毎日ただ蕎麦ばかりをたべてお過しになつたそうでありま
す。先生から直接きいたことでありましたが、三四十銭な
どの蕎麦を買つておけば一ヶ月くらいは凌げたという御事
であります。そんな貧しい生活をなさつていながら、小僧
さんなどを大変に可愛がつて、柿の実を小僧さんに与えら
れる時、臼杵先生ばかりは親切に皮をむいて渡して下され
たそうであります。まるでお母さんのようであつたと法隆
寺のお弟子さんが言つて居られました。

先生は懇親の集りの時には詩吟などもなさつたと、やは
り法隆寺のお弟子さんからきいたことがありましたが、私

は広島で皆さんと一緒に先生の還暦のお祝をしました時のことが今でも鮮かに記憶に残っています。六十人ばかりが一緒にお祝をして、お婆さんの中には踊ってお祝をする人もありました。その中に平野覚性さんがおいでになつていました。先生のすぐお隣に座つていられて、先生が大変面白い唄を知つていらつしやるということをしきりに言つて先生をそのかさねました。到頭先生は全く書生が上野公園あたりを胡弓を弾きながらうたつて歩くことも言つてもいいような唄をおうたいになりました。そんなことで私は先生に非常な親しみを感ずるようになりました。

中津のお宅に幾度か参つて泊めていただきなどしました。そんな時はお酒をいただいて下手な謡曲をうたいなどしまして、仏法のお話など少しもきかずに甘えて過したことも二三度ありました。先生は不仕合なお妹さんと一緒に暮しておいでになりましたが、先生とお妹さんと私とで秋の稲穂の実つた田の側に椅子をもち出して中秋の月を眺めましたことなど、まことになつかしい思い出でありましていつまでも忘れられません。

併し先生は一つの大切な信仰上のことを問題として私に残して下さいました。第十八願に徹したということ、これで万事解決とおさまりかえることではない、十八願に徹すれば十九の願や二十の願に迷つて行く自分の姿がはつき

白杵先生の御教でなお心にしていますことは涅槃經の慈悲隨逐ずいしゆ童子のごとしというところをしみじみとお説きになつたことであります。慈悲の親は子について行く、子を導くというのではないというお心持であります。そして大無量壽經をお説きになりました時に、諸の黎庶れいしよに施すこと純孝の子の父母を愛敬するが如しというところを、心をこめてお説きになつたことが私の心にしみこんでいます。

先生の大無量壽經の御講義を拝聴しましたのは比叡山での講座の時でありました。平素は静かに御説法遊した先生が、その時ばかりは非常な熱で、殆んど泣かんばかりの御態度と御声でお説きになりました。私どもはびつくりしたほどでありました。併しそこに先生の御信念の底に非常な熱があるということを始めて知りましたのであります。平素はその熱が内にこもつて外面は実になごやかにお説きになつたのであります。そこに先生の感化の御力があつたのであります。私が五十一才の時にチブスで二ヶ月入院していました時、沢山の方々からお見舞をいただきましたが、私の家内が感じを述べまして、此の沢山の方々の中に一番温かなお心でお見舞を下さつたのは白杵先生であると申しましたが、まことにそのとおりであつたとおもいます。本当に信仰の上で私がお母さんと親しみ申上げたお方であります。

りと見えるようになるかと仰せられました。或る人に此の事を申しましたところ、それは法の深信しんじん、機の深信しんじんということになるのではないかと言われましたけれども、私は先生の此の御教を今少しちがつた趣に受取つていますのであります。それは信後の生命の動きがはつきりと見えて来ること、色々の物事にぶつかつて躓つまづいて、そこに自力心が起こつたり他力の中の自力というように心が動いたりする、自分の生命の動きがはつきりと見えて来て、こんな迷いの自分であればこそ第十八願の絶対のお救いが徹底してひびいて下さるのであると感ずるところにお念仏があり、そこに私の人生の行路の辿りがあります。第十八願の中に入り込んで腰を落着けているのではないのであります。十九、二十に迷うところに第十八願のお救いがあり、そこに私の全生命の動きがあります。それが機の深信ではないかと言われるかも知れませんが、併し白杵先生の仰言ることの方が私の現実の生命の辿りにしつくり致しますのであります。

そこで先生はこれが愚禿抄の中に述べられてあると仰言つて、その場所を指示して下さいました。然るに何という私の粗忽そとでありましょう、その場所をはつきり記憶しませんでしたのであります。その後愚禿抄を開きます度毎にそこをさがしますけれど、どうもわかりません。私はやはり仕方のない奴だと思ひます。

先生の最後のお病氣は相当にながく、大変にお苦しみ遊された御病氣でありましたが、私はお見舞に参ることも出来ませんでした。先生のおかくれになりましたあとで、中津に参上してお妹さんにお悔みを申し上げましたような次第でまことに相済まぬことでありました。お兄様であらせられる先生とお妹さんとが互にお助け合い遊され、先生はお妹さんを精神的に信仰の上からお導き遊され、法隆寺で受戒をさせられました御事など皆何とも言えぬ尊いことであります。先生は一生涯結婚をなされなかつたお方で法然上人の再来とでも申上ぐべきお方であつたのであります。

(昭和三十八年十一月一日稿)

老をのぶる歌 良寛 師

行く水も せけばとまるを 老いらくの 又かえるとは
うつせみの 人も語らず とつ国の ふみにも見えす
古も かくやありけん 今の世も かくぞありぬる
後の世も かくこそあらめ かにかくに すべなきものは 老にぞありける

○

うつつにも夢にも人のまたなくに とい来るものは老にぞありける
ねんごろのものにもあるか年月は 山の奥までとめて来にけり

仏の存在について

高 原 憲

まじめな求道者でしかも教養ある人からよくこんな悩みを聞くことがある。

「仏は見たこともないし、従つてお浄土の存在もわからない。吾等の信仰の対象がこの有様であるからお念仏は唱えながら、何やら不安な気持ちでおちつかない」

と。五十余年の間聞法している私も、最近まで同じようなやみを持つていた同行である。

私は五十幾歳になるまで両親の膝下にあつて、両親には少なからず苦勞をかけて来たものである。血肉を分けた親の姿は、いやというほどの眼で見えて来た私には、その真実の親心というものは更にわからなかつた。私自身が子供の親となり、親としてのいろ／＼な苦勞をなめさせられて、近頃になつてやつと親のやるせなさを味わせて頂き、この親の慈悲を通して、今は亡き親の姿を思い浮べているような鈍感さである。仏となれば一度も見たこともない私であれば、仏心などわかるはずはなかつた。ところがやるせない親心を通じて、又周囲の善知識をご縁として、いく

らか仏の慈悲というものを気付かせて頂き、姿なき仏をかすかながら仰がせて頂いているのである。勿体ないことであるが、私の親の姿を思い浮べるときには、親を通して仏が私に現われて下さるのである。

私は中学生の頃から、当時一高の校長であつた新渡戸稲造先生をあこがれていた。家の貧しさも知らず、一高入學を決意して、中學を出ると直ちに一高入試のために上京した。十八の時である。ある日親から手紙が来た。学校も大切であるが、身体あつてのものだね、病氣をしないように身体を大切にしないさい。入試のことは第二の問題であるという慈愛の内容である。私はこの手紙を心からおし頂いた。そしてますますふるいたつて、当時の最大難関であつた一高の第三部に入學が出来た。全く親の慈愛のおかげであつた。やるせない親心に徹した最初であつた。その年から近角常観先生を講師とした「高德風会」の會員となり、はからずも先生のご教化にあずかるご縁を恵まれたのである。

私自身、論理のないわるい頭のためか、当時近角先生のあまり論理の少ない御法話は、私には実に魅力的であつた。先生のご法話の中で頂いた「母の手織の着物」は何十着であろうか。「何も食べられない重病人へのなさけのカユ」を頂いたのは何十杯であろう。ウバ捨山のおたとえも耳にタユの出来るほどに、この耳底に残っている。今頃になつてウバ捨山のやるせない親心が頂かれ、慈愛のカユが心から味えるようになった。其後優秀なる僧侶のすばらしい法話をきいて私はおどろいた。料理の講習会で実に立派なお料理のあり方をきいて、あのカユの味など忘れるほどのほせあがつたのである。今になつて、私自身がカユしかいただけない重病人であることを気付かせて頂くと、私のいたくものは、なさけのカユの外にはなかつた。

親不孝の伴が、老母をツツラに入れて、奥山にせつせと登つて行く。老母を捨てたためである。老母はツツラからそつと手を出して木の枝を折つて道しるべを作つて行く。それに気付いた伴は「母は逃げ帰ろうと思つて道しるべを作つているな……」と考え、片端からその道しるべをけとばすようにして進んでいく。

いよいよ奥山に辿りついて、老母をそこにおき去りにして逃げ帰ろうとする伴を母はよびとめて

「お前はこの母を捨てることに夢中になつて、自分の帰

り道のことは忘れてるようだが、行く先の短かい母はどこで仆れてもよいが、お前はこれからだ。道しるべを作つておいたから、それをたよりに帰つておくれ」という。現に親を捨てる極悪非道の伴のために、その親が帰りの道しるべを作つて呉れたのである。限りなき罪惡感に徹して、間一髪を入れずに、やるせない親心を通して仏の慈光に照らし出された自分の見苦しい、あさましい姿に慚愧する。

「お母さんすみません」などと言訳をする間は、まだほんとうに救に徹したのではないと近角先生はおさとしになつた。人間の言葉ならざる念仏より外に口には出て来ないのである。まだ見たことのない仏の存在は、血肉をわけた親のやるせない心を頂くよりも、更にわかりにくいことである。このおそろしいウバ捨山のような娑婆の出来事や、死をもつて迫る病氣などがご縁となつて、仏は私を照らし出すのである。この周囲の善知識を通して御縁は開けて来るのである。たゆまぬ聞法によつてこの御縁は次第に深められて来るのである。



嬉しい事 悲しい事

三 瓶 徳 英

一週間ほど前の九月十四日正午すぎ、一人の青年が一個の新聞包みを出して、これをアナタに届けてくれと頼まれたのでお渡しするとの事。どなたから頂いたかと尋ねるとその青年は、私はトラツクの助手だが、荷物を積んで大田市へ行き、用事をすませて賑うとした時、井田へ帰るなら、此品を竜蔵寺隠居の老僧に届けてくれと頼まれたのでハイハイ承知しましたと受取り、其人はすぐ立去られ、差出人も受取人も表面には何も書いてないが、内に書いてあるだろうと、運転手と話して持ち帰つたとのこと。

サテ何品か、何人の恵送かと新聞包を解いて見ると、正宗と書いた一升で、書いたものは何もない。サテサテ、コレハ、コレハ案外な頂きものだが差出人の見当がつかぬ。

あちらには親戚も知人もあるけれども、この高価なものに無名で下さる人は特別なことである。彼か、否々、彼の人か、彼でもあるまいと三四の人々を物色して往復はがきを出すことにしよう。とにかく仏様からの賜り物として仏前に供え、誂経し、仏前で口を開き六十六位を頂戴したと

い、一合瓶に一杯をなるべく三日間に頂き、近隣の御同朋から新鮮な野菜や果物を頂いて、生かされて居ります。

半合飲半合食 此是如来恩賜

老朽碌々起臥 身心満足称名

と、出鱈目な詩をつくりました。

私の生活信条は近角先生から聞かせて頂いた御教語であります。世の中は日進月歩を通りこして、分進時歩のあわただしさを感じます。すべてが便利にはなつたが、危険がともない不安心不満足が充満した世の中のように思われます。しかしながらすべてが世界的になつたために、大戦の末期の様に老人を酷く取扱わなくなり、敬老会だ、老友会だと老人の芽が出た様に見えますけれど、老人にも様々あつて、国宝級の老人、無くてはならぬ老人も数多く居られるけれど私の様な老人は、実は世の中の厄介者で、大部分の若い人達は侮る、相手にせぬ、挨拶せぬという様なことに出会い腹が立つて憤懣の炎が燃える。この悪感情の高昇を飛び越えて平気に恒々として進む妙術が必要であります。私は近角先生の御教誡により、いつも安々とその高塀を越えさせて頂いて居ります。私の頭にいつも先生の生きたお声として顕現するのであります。

その尊いお言葉は、

ころ、実に美味で、ホロリと快感がわき、案外な大好物の贈り物を頂いて嬉しい事、く。

私の乞食の様な生活を憐れみ、無名で送つて下さつたのであろう、私を可哀相と思うて下され、私に向つての他力廻向の甘露であるとして、御神酒ならぬ御仏酒、その味甘露の如しとはこのことでもあろうか。これがこの世での飲み納め、姨捨山の故事など思い出し乍ら、浄土百味の飲食をこの穢土で頂くことの仕合せさ、飲み度いと思えば直に出現する、食いたいと思えば百味の御馳走が目の前にならぶ大無量寿経に

若し食を欲する時……百味の飲食に自然盈満す。この食ありと雖も実に食する者無く、ただ色を見、香を聞いて意に食をなすとおもうて自然に飽足し身心柔軟なり……とあれば、この世の如く、体内に飲みこみ、食い込むという様な事ではないから、毎日の一飲一食が、永い迷妄界の飲み仕舞い、食い終りとなることを思い、医師から私には酒が毒だと云われるけれども、行先短い憂き世の旅と思

「他人から悪口を云われ、悪く取扱われた時、先方をにくみ、悪く思うならば、わるく思う方がわるい。こんなひどいことを云う者は他に居ないかもしれぬ」
との御教語でありました。

よく／＼考えて見ると、先方が悪く思う、悪くすることは、先方には先方の考える理由があるでありましょう。私先方へ対して平常ころよく思うていたか、親切にして居たかという事を考えて見れば、人生五分々々のお言葉が思われるのであります。

今私が現在の生活に於いて、先生の御教誡によつて、一応いかりうらんだ心が和み、念仏することが出来て、身心共に救われることが度々あります。

嬉しいことも暫時で消え失せて、淋しい心になつてしまひそうですが、池山先生の

たのまるるただ念仏のわれにあり

さるべき業はさもあらばあれ

の御歌に慰められます。

悲しいことは、思い切つて酒が止められぬことと、寿命が刻々と削られて行くことを考えながら、愛欲と名利のジヤングルに迷いこんでいる時。可愛相な私の心を悲しく思い、毎日三部経と御和讃を少しずつ繰り読み、文類正信偈と歎異鈔の九章と十三章を拝読して、一日々々を送つて居

ります。

平仄^{ひようそく}も何も知りませんけれど、詩の真似をしました。御叱正をお願い申し上げます。

往時茫々一夢中 遙眺石見富士空
蔽衣粗食望西屋 每漂業海八旬翁

酒見忠勢先生信仰講演 (二)

西村正安記

又
聖代受生多幸慶 恩賜財貨安生計
電波電灯電熱器 余生悠々感謝情
昭和卅八年九月十九日稿了。

八十三翁 徳英和南

夏期求道会が初まつたので西原君もそれを聞くことになりました。朝九時から正午までの講話をきき、それから家に帰って夜の講話に出席するには、西原君の様に遠方の人是不便でした。西原君は私の宿をたずねて

「私は家に帰るのも大変ですから、貴方のお誘いをうけて、まあ関^{かま}つづしにと思つてやつて来ました。だから貴方から別に有益な話を聞こうとは思つていません。只聞けば貴方は弁護士で県会議員ということでありますから、そのような人がどうして仏様を信ずるのか、それは一体どんな様子なのか、それを一度聞いて見たいのです」と、西原君は正直なことを言つて、更に、

「この矢は一体誰が射たのか」

「この矢は何処のものか。矢の羽根は何鳥の羽毛か」

「矢の先の金物は何で造つたものであろうか」

「毒は一体何の毒か……」

こんな詮議が続きました。そこへ医師がやつて来ました。医師は早速毒矢を引き抜こうとしました。ところが家臣はこれをとめて、

「貴方は一体どういう経歴を持つている医師ですか」

「貴方の技術は誰からうけたのですか」

とたずね、更に医師の身元調べをし始めました。こんなことをしているうちに時間が過ぎ、王の全身に毒がまわり、とう／＼死んでしまつたという話であります。

そこで私は西原君に言いました。

「貴方が先刻、煩悶がやまないと言つたのは、これは丁度貴方の心には毒の矢があたつているようなものではありませんか」

すると西原君は、急に大声で叫びました

「そうです、その通りです。私の心には今毒の矢があたつて居るのです。それで非常に苦しんでいるのです。近角先生にその毒矢を抜いて貰いたいのです、それなのに先生はちつとも抜いてくれようともせず、只仏様のお慈

「貴方はほんとうに仏様を信じているのですか」
「そうです、信じて居ります。そうでなければここへ来ません……」

と答えると、西原君は又問いつめます。

「一体、仏様はどんなもののですか」

「貴方は、毒矢の喩^{たとえ}を聞いたことがありませんか」

そこで私は大要、次のような話をしました。

昔、印度に王様があつた。狩に出掛けましたが、道で毒矢が飛んできて王様にあたりました。王は非常に苦しみました。家来どもは早速集つて来て評定をしました。

「この矢は何処から飛んで来たのか」

悲ばかりを言われるのです。私はそれより一刻も早くこの毒矢を抜いて貰いたいのです」

その言い方の真剣なのに私も驚かされました。そこで、

「その毒矢を抜いて下さる方が仏様ではありませんか。

私共が煩惱に苦しめられ間違つた思に狂乱するとき、これを治して下さるのは仏様より外にはありません、それは決して議論や学問ではなおりません、唯仏様のお慈悲一つになおされるのです。

貴方は先刻、仏様はどんなものですか、と私に尋ねたでしょう、そんなことを詮議立てするのは、毒矢にあたつて苦しんでいる王の家来が、矢の由来や、医師の身元調べをやつて居るのと同じです。そんなことは平常、ひまな時にすることです。今貴方には毒矢があたつて居るのです……」

私は更に続けて申しました。

「私は仏様に導かれてここに来て居るものですが、貴方もやはり仏様に導かれて来ているではありませんか。

仏様の引力は貴方を近角先生の所に引き寄せたのです。貴方は先生の所へはもう来ないと思いが、又来るようになったのは、貴方が現に仏様の引力に引き立てられているからです……貴方は先刻も言つたでしょう、東京市中の何処にいても、どこも氣持が悪く心を苦しめら

れるが、只近角先生の所だけは、私の悩みを聞いてくれ
そして同情してくれるので一番気持ちがよいと言つたで
はありませんか。貴方の奥様やご近親の人々までが貴方
を嘲つているのに、近角先生だけは非常にご同情下さる
ので気持ちがよいといつていられる。貴方が気持ちがよい、
暖かいと感ずるのであればそれでよいではありません
か」と私が言うのに対して西原君は

「そういわれるとそうでありましょうが、私は矢張り仏
様が信ぜられませんか」

と答えるのです。そこで私は香川県の或る教育家の会合で
話した大要を次のように語りました。

その時私は「概念と体験」ということについて話をしま
した。その話がすむと、一人の先生がたずねました。

「要するに神とか仏とかいうものは想像でしようない
と、私は早速、

「そうです。神とはどんなものか、仏とはこんなものか
というのは想像です」

というとき、その先生は、さも我が意を得たりと言う顔付に
なり、そして高らかに笑いながら、

「そうだろうと思ひました」
というのです。私はすぐ言ひました。

「神が宇宙を造つたとか、仏様が極樂を造つたとかい

のは想像ですが、しかし信仰は事実です、実験です」
と。するとそこに居た先生方も注意深い眼を向けました。

この時西原君は突然言い出して、

「ほんとうに実験が出来るのですか」

と問うのです。私は答えました。

「その当時香川の先生は貴方と同じ質問をされました」
と言つて、次の様に話を続けました。

昔なら釈尊の言葉だけで人々はこれを信じたかも知れま
せんが、現代人には実験なしには信ぜられないのです。殊
に私の性質はなか／＼疑深いので、人の言つたことや、新
聞雑誌に書いてある位なことでは容易に信ずるということ
は出来ないであります。それは私が数学、中でも幾何が
好きで相当理屈ばかりつたのです。その後裁判官となつて見
ると、人の言つたことや、新聞雑誌に書いてあることをそ
のまま信じて居つては、とても裁判が出来ないものである
ということに充分に体験していますから、私はなか／＼容
易に世の中のことを信じない性質が強いのであります。そ
こで私は実験なしには信ずるということはどうしても出来
ないのであります。

しかるに私は仏様を信じているのです、それは^{たゞげ}体験され
実験されたから信ずるようになったのであります。

私は電気のことについて考えて見まするに、私の若い時
代には電気の本体を探ねて、或は摩擦であり、感応である
というような学説がありました。そしてダイナモを廻転
して実験して私共に説明してくれたものです。その後私が
東京に勉強する頃になると学説が変りました。当時私は財
的に不如意でしたので、東京の電気鉄道を設計した峯博士
の助手になつて居りました。峯博士から聞かされたのは、
今迄は電気は磁鉄の摩擦で発電するといつたが、実験によ
ると、磁鉄より軟鉄の方に強い電気が起ると知れて来た、
そこで電気の学説も変つて居つた。……所が今日では電子
論という学説に變つて居るが、将来にも学説は変わるべきも
のと予想されます。

学説は斯様に変りますから、それでは全く値打ちが無い
かというに、そうではない、斯様な学説があつたために学
問が進み、実験が積まれて進歩を促進したのであります。

かように電気の学説は変り、将来も変化して行きますが
それは想像であり、仮説であるからです。それは電気学と
いう学問を進歩さすといふことの役目を持つだけです。

「学説は斯様に變化しても、炭素線に電氣を通ずると光る
といふことは事実で、電灯は実験であります。電氣の学説
は想像であり仮説であつても、電灯は事実であり実験であ
ります。それと同様に、真黒な人間に仏の力が通ずると、

その人は光つて来るといふのは事実であり実験でありま
す。私はこのように思つて居るものであります。

西原君は熱心に聞いて居られましたが、更にたずねて

「電氣はそうですが、私共の心もそうなるのですか」

「えゝそうなんです。私と貴方とはまるきり反対の方向
から進んで来たものであります。……」

と答えて、大体次のような私自身の話をしました。

私の家は神道でしたので、神様を信じて居りました。私
の幼い時には神様にお灯明を上げるのが私の仕事と定めら
れて居りました。私は当時、神様にお灯明を上げる時には
何ともいふようないふ尊厳な心持になつたものです。斯様
な成長をした私は、仏法をきびしく悪口を言ひました。日
本人のくせに印度の人を拜むとは実にけしからん奴だ、
と。こんなことを思つていました。ところが私が十八歳の
時、或事情のため中学校をやめて家に帰らねばならなくな
り、長崎から郷里の田舎に帰りました。私の郷里にはその
当時寺院の次男で英語の出来る人が居りましたので、英語
を教えて貰いたいと頼みました。すると、仏法の話を聞く
のなら聞いた時間だけ英語を教えようと言ふのです。私は
英語が習いたいばかりに、仏法を聞くことに同意しまし

た。

こんなことで坊様から仏法の話を書くのですが、その折チヨットでも欠伸をしたら、その日は英語を教えてはくれません。その時は原人論の講義でした。私は色々な質問をし、議論を吹きかけました。或時、無限ということについて聞いたりすると坊様は答えが出来ないのです。私はわが意を得たりと太いに鼻を高くして居つたのです。然し坊様の方はそんなことは一向気にとめず、毎日々々丁寧に次から次へと教えてくれ、私は最早議論することが出来なくなりそれと共に仏法は迷信でないということ始めて知りました。

私が東京の遊学時代、元良博士の学説を学びました。それは大体次の様なものです。

万物は實在、すなわち本体と現象とに分けて考え、この宇宙の實在を理として研究するのが哲学であつて、それを人格的に見て意志ありとするのが宗教である、それであるから日本神道の神も、仏も、キリスト教のゴットも皆同じである。支那では大極は無極なりと易にとき、老子は道、孔子は天、と言うのも皆同じである。それ等は皆宇宙の實在を名称を代えて言い現わしたものに過ぎないと斯様に立論するのであります。

私の職業の法律学にも、法人についての学説にこの思想

私はそれを体験しました、壊されて苦しみました、それは私の母親が亡くなつた時に初めて分つたのであります。私は斯様に話して私の苦しんだ有様を大体次の様に語りました。

私は四十を越える頃までは親孝行が出来ているものと思つて居りました。ところが母親が亡くなつて見ると、親不孝者であると知らされました。それと共に不忠の者であると知つたのであります。私は今迄向上していると許り思つていたのですが、それどころか向下していると知つたのであります。

私は仏書や世間の学問を致しましたが、八学を成すの要は聖人となるにあり、と云ふことにあつたので、これまでは私の人格は向上しているとばかり思つていました。……力学では、或る力が他に障害せられることがなければ、それは無限に或る方向に進むものであると、私共の心も一現象であるからその法則に従うべきだと考えて居りました。ところが自分の人格は向下している、落ちつつあると気付いて見ると、それは、大変な驚きとなつたのです。そこでどうかして向上させようと色々努力しましたが、それがとも出来ないのです。

もと／＼人の心というものは自分の思うままに自由自在

の引用せられているものがある。法人の学説は色々と変化して来たのですが、明治二十八年頃には、法人實在説と言う学説がドイツから伝わつて来たのであります。……この学説も一切を實在と現象に分けて考える元良博士の思想をなすものであります。

私はこの学説を真理だと考えて居つたのです。宇宙の本体が真理であると思ひこんで得意になつていたのです。

私はこんな話をしてから西原君に申しました。

「どうです、私は貴方とまるで異つた考えを持つていたでしょう。私は真理が本体であるということは間違ひのないことと思つて居りました。然しその後近角先生から教えられて見ると、私の思想は受け売りでありました。それは学であり、想像であり、仮定であると分りました。これは實際問題に突き当つたら何の役にも立ちません、私はこれを知りました、これを体験せしめられたのであります。

それでは、それは一向に値打がなかつたかというところではありませんでした。世の迷信を止めさせるには大いに力となつて居るものであります。然しそれはどこまでも机上の論でありますから、ちよつと見には如何にも高尚であります、實際問題に突きあたるとすぐに壊されて苦しまねばなりません。

にならないものであります。自分と自分の心の方向を転換しようとしてもなか／＼出来ません。人が浅薄に考えている時は、忠も孝も容易く出来ると思つていますが、よくよく省みると、とても出来るものでないと分つて来ます。かうなつて来ると、其の人は非常に苦しみます。私もそうでした。当時私は教育家の会合である至徳会で議員をして居り、また其他の名譽職を持つていまして、方々を廻つて講演をして歩いて居りました。

ところが、私の人格は下落している、不孝、不忠者であると知らされますと、恥かしくて、それを皆辞退しました。……それからかれこれ二年ばかりも苦しみ続けました。そのあげく、多度津の丸尾猪太郎氏に誘われて近角先生にお目にかかるようになったのであります。

当時の私の苦悶のひとつをあげますと、私はもと／＼眠ることが大変上手で、人と話をしても用件さえすめばそのまゝすぐ眠る、坐つていても、立つていても眠る、床に入ると無論すぐ眠るという具合でした。ところが苦しみ出してからはなか／＼眠れません、その苦しさは言いようがありません。

私は当時、こんなに考えて居りました。自分は実につまらぬ輩じや。もう弁護士も止めようと思つたが、さてそれをやめて他の職業をしても、それは皆駄目である。それか

源通寺老住手記

天上の月一輪

大海嘯にのこるものは、天上の月一輪。仰せが仏法なり、聞いた心が仏法ではない。仰せだけが真実のこと。義なきを義とすること。

逆公事

さわりにならぬとある御目当の罪惡を苦しめ邪魔にいたし、いらぬ／＼と仰せられる有りがたい心をつかみながら、仏にまいらせて助かりにかかろうとするは逆公事である。助かりたい心をおこす故たすかるのでない。仏の助けたいが行きとどいて助かるのじや。

声が白道

声が道なり。声のかからぬところへは行けぬ。今度はお声が白道となるなり。

またお念仏は飯なり、勅命なり。御和讃はお菜なり。いつも助くる／＼待つている／＼のお喚び声なり。

朝夕に口より出する仏をば

しらすにすぎにしことのくやしき

未完

聖人に導かれて

花田正夫

歳末、聖人に導かれて参りました四十年の私の辿りを申上げて皆様方のお示教を被りたいと思います。

私は十九歳の秋、伯父にすすめられて歎異抄を読んで、はじめて親鸞聖人の教にふれました。その時の驚きと喜びは非常なものでありました。その夜はじめて仏様の夢を見ました。それと申しますのも、それまでに二つ三つの教を或は聞きかじり、或はひろい読みをしました。が、いずれもいずれも高根の月で手がとどきません。私のような平凡な人間は、一生そうした尊い教とは縁がないものかという歎きに沈んで居りました時、

「弥陀の本願には老少善惡の人をえらばれず」という廣大無辺な教をきき、私如き者のたすけられ得る道がそこに知らされたからであります。

それからズーと聖人をお慕いし、聖人に導かれてまいりました、そして何時も、本当の聖人にしたしく接したい、生き生きとした聖人のおこころに浴したいという願いを持ち続けてまいりました。

そのための第一の道は、聖人の御伝記をむさぼり読み、または御旧蹟をたずね、或は御真筆やら御絵像を拝見してまいりました。そしてボンヤリながら聖人九十年の御生涯を浮き彫りさせて頂きましたが、これは然し聖人を外から眺めたお姿で、よそびととしての聖人にすぎませんでした。

第二の道は、聖人の御著書に親しんで、そのおこころに触れさせて頂くことであります。その道は愚鈍な私には峻しい道で、文字通り驚馬に鞭打つという具合でありまして、先哲方の講録やら、善友知識の導きをうけて参りました。

以上の二つの道を牛歩遅々としてとつてまいりました時、恩師、池山先生から非常に大切なヒントを与えられました。それは

「聖人をありありと拝見しようと思えば、眼を外に向けずは駄目である。内にわが心をみつめる時そこにチャン

と聖人が控えておいでになる」

ということでありました。かように聖人の居られます在所が、私の内心と知らされてからは、聖人と私との間は一層緊密となり、聖人と一味にとろけて、打つて一丸となるおもむきがあります。

例えて申せば、たまさかではありませんが、しみじみと仏恩の身にしてみてもよるに「一人居てよるこばば二人と思うべし。二人居てよるこばば三人と思うべし。その一人は親鸞ぞかし」とのお声が私の内からきこえてまいるのであります。

また反対に、身から出た錆とは申せ、浮世の冷たい風にも心も凍りつき、煩惱の黒雲が心の空一面を覆うて、念仏申しても、糠をかむような、砂をなめるような、味気ない時に「親鸞もこの不審ありつるに、おなじころにてありけり……」とチャンと其処に聖人はお姿を現して下さるのであります。

或は愛別離苦の悲歎に沈み、愚痴に塞される時「今生いかにいとおし不便と思うとも存知のごとくたすけとぐる」と極めてありがたし……「名残りおしく思えども娑婆の縁つきて力なくして終るとき彼の土へは参るべきなり……」と聖人のみ声が涙の底から浮んでまいります。

または、きびしい業風にさらされて荒野に一人たたずん

聖人が私の内で、徹底して同座して下さることによつて私の全煩惱が聖人の内にすつかりとけこみ、勿体ない限りであります。聖人と私が二つのまんま一つ、一つのまんま二つと自然に一味にさせて下さるのであります。島根の篤信者、浅原才市さんの歌に、

あなたのところが わたしのところ

わたしのところが あなたのところ

わたしがあなたになるのじやないが

あなたがわたしになるところ

とありますが、全くその通りで、私が聖人になるなどとはもつての外であります。聖人が私に徹底してなりきつて下さる、そのまんまが「他力の悲願はかくの如きわれらがためなりけり」としられて、いよいよたのもしく覚ゆる」と、そのたのもしさを味わさせて頂けるのであります。

想うに、人類三千年の歴史におきまして、聖者、賢者、哲人、苦勞人が綺羅星の如く輝いていられて、凡愚のわたしどもに、深い同情と、広い理解をそれぞれにもたれてはいますが、ギリギリのところまで行くと、手がしびれると申しますか、力つきて矢つ張り何処かに姿を消されるので、最後にはひとりぼっちの私が、待ちも待たれもせぬ身をかこつばかりであります。その中にひとり聖人だけ

で行方に迷う時、そこにも聖人の「さるべき業縁の催せば如何なる振舞もすべし」とのみ声がひびいて参ります。

このように数えあげますと限りのないことであります。よろこぶにつけ、よろこばぬにつけ、よきにつけ、あしきにつけ、善惡淨穢のへだてなく、私の内心の何処にでも聖人は現れて下さるのであります。それは親を亡くした人々が、外に親を見ることが出来なくなつて、自分の内から浮び出て下さる親を知り始めるのと同じおもむきであります。

さて、このように聖人が私の内に同座して下さるということは、まことに有難いことであります。若し聖人のお心の何処かにまだ光のとどかない、うしろめたい暗いところがあれば、聖人は同座して下さるわけに参りません。何処々々までも同座して下さるのは、聖人ご自身のあらゆる煩惱、罪業のすみずみまで「さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」と尽十方無碍の光明にとかされていられるからであります。聖人は無碍という字に左仮名をつけられまして「いかなる惡業煩惱にもあきれたまわず、すてたまわぬをいう」と解いていられます。

は、何処々々までも、何時々々までも、私の内心に同座しておして下さるのであります。この御恩まことに謝しがたく、つくしがたいことであります。

私も来年は馬齢六十を数えます。老人と世間から呼ばれる年であります。孔子は「耳順」と申し、この年になると人生のあらゆることが理解出来て、どんなことをもすなおに聞きいられる年というのであります。然し私は依然としてかたくなで、こころせまく、事毎に耳さかろう、して見ようのない身であります。かかる身をも聖人が全理解して下さることに限りないよろこびと力と生甲斐を覚えるのであります。それにつけても、聖人いままさずば、念仏ましまさずばと、仏恩師恩を渴仰申しつつ、師走の日を迎えかつは送つて居ります。

昭和三十八年、十二月、稿了。

啄木の歌

灯影なき室に我あり

父と母と壁の中より杖つきて出ず

あとがき

年の瀬が参りました。学生の時、伯父の家で卅一日には除夜の鐘を聞きながら、この一年を省みさせられたことがあります。何とかして私に念仏申されるようにしてやりたいという伯父の願いがあつたこと、の今更のように身にみして感じるの、であります。その私はすでに伯父の年よりも父の年よりも過ぎました。臍をかむ思いというのはこうしたことでありましょうか。

仏」という題で、御自身の体験のままを講話して頂き、感銘深いことであります。但し方丈の狭い一室庵とて、皆様に御辛棒を願つて恐縮でありました。十二月五日の会は、福島先生の華嚴經の八法界品、善財童子の求道の最終回の講話を頂きました。難解の書として有名な入法界を先生のお導きで一応聴聞させて頂きましたことは、またとない幸慶でありました。

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜、一道会館講話。
午後一時半。新郊通一丁目下車東へ一丁半入ル

○ 毎月廿四日午前、午後、昭和区小椋町、教西寺、法話会御器所通り下車。桜花学園東。

執筆者の御住所

○ 本月は近角先生の御忌月とて、先生に御縁の深い方々の御原稿を頂きました。東京の福島先生、長崎の高原先生、島根の三瓶老師、高松の西村先生、夫々に、青色青光、黄色黄光、白色白光、の法話を頒つて下さいました。お味読下さいますように。

東京都世田谷区上北沢三丁目一三二二 福島 政雄
長崎市東長崎町町名 高原 憲
島根県温泉津町井田 三瓶 徳英
高松市五番町四ノ一三 西村 正安

十一月十日には榊原徳章師に「禅と念

定価 一部 二十五円(送共)

半年 百五十円(送共)

一年 三百円(送共)

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市中南区駄上町二ノ八八

名古屋市中千種区千種町馬走二八

印刷 人 本田 政雄

名古屋市中南区駄上町二ノ八八

發行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光 第十五卷 第十二号 昭和三十八年十二月十五日 発行(毎月一回十五日発行)
昭和 三十四年 七月 二十三日 第三種郵便物認可